機関紙はどう作られねばならないか

一五一　エス・イ・グセフへ

レーニンからナツィアへ

一九〇五年九月二十日

親愛な友よ！　手紙第三号、ありがとう。たぶん、その一部分を印刷することになるだろう。君のはじめた編集局との話合いは、形式にすぎない問題（規約、連絡、アドレス、その他の問題）や、単なる通信上の題目（しかじかの事件があったなど）についてではなく、君の見解の**内容**や、われわれの戦術についての君の**理解の仕方**や、君が討論、集会などでこの戦術を**いったいどう**実行しているか、についてだ。われわれとロシアの実践家とのこうした話合いは、われわれにとって**きわめて貴重**なので、君に切望したいことは、中央機関紙を**自分の**中央機関紙と見なそうとする人（党員はだれでも見なそうとするべきだが）がしなければならないのは、形式的な返答や報告にとどまることではなくて、**発表するためにではなしに**、しかじかの見解の実行について編集局と話合うための思想上の結びつきをつくりだすためにこそ、**話合う**ことだということをいたるところで宣伝し、気づかせ主張することだ。こうした話合いをただの甘やかしとみなすことは、狭い実践主義に陥り、われわれの実践活動全体、煽動全体の原則的・思想的側面を運まかせにすることを意味する。というのは、はっきりした、よく考えた、思想的な内容がなければ、煽動は空文句になるから。ところが、はっきりした思想的内容をつくりあげるには、中央機関紙に寄稿するだけでは足りないのであって、実践家がしかじかの命題をどう理解しているか、しかじかの見解をどう**実行**しているかを、いっしょに討議することが必要である。そうしなければ中央機関紙編集局は宙に浮きその宣伝が受けいれられているかどうか、その反響があるかどうか、それが生活にどんな変化をあたえているか、どのような訂正や補足が必要であるかが、わからないだろう。そうしなければ、社会民主主義者は、作家は書き、読者は読むというような状態に堕落してしまうだろう。われわれの党的結びつきの意識はまだ弱い――これを言葉によっても実例によっても補強しなければならない。

君の手紙の一部分を発表するために、君の実例を利用することに努力しよう。われわれはだいたい意見が一致し、君と意見が一致した（君の思想は『二つの戦術』の私の思想と一致する）。なお、君が、大衆に蜂起の準備をさせるという言葉をとらえてメンシェヴィキを攻撃するのは、理由がないようにおもわれる。そこに誤りがあるとしても、それは根本的なものではない。お元気で。　　**レーニン**

ジュネーヴからオデッサあて

第 34 巻『一五一　エス・イ・グセフへ』P379～380

1905 年 9 月 20 日

グセフ、エス・イ（1874 ― 1933 年）

すぐれたボリシェヴィキ。1896 年にペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」にくわわった。1902 年のロストフのストライキを指導し、また 1903 年 3 月の同地のデモンストレーションの組織に参加。そののちジュネーヴにおもむいた。第二回党大会にはドン委員

会の代議員として参加し、断固としてレーニンのがわに立った。1904 年 12 月にはペテルブルグ委員会の書記、のちオデッサ委員会の書記、1906 年にはモスクワ委員会のメンバーであった。1906 年春の第四回大会に参加。1906 年 9 月に逮捕され、トボリスク県に三年間流刑されたが、1909 年春に逃亡した。1909 年秋にはペテルブルグでスヴェルドロフとともに活動した。その後ながいあいだ重い病気にかかっていたが、1917 年の十月革命にさいしては、回復してペトログラード軍事革命委員会書記となった。1921 年春にはロシア連邦共和国政治局長官および革命軍事評議会のメンバー。1923 年以後党中央委員、1925 年には党中央委員会出版部長。1928 年以後にはコミンテルン常任執行委員。

ポイント

はっきりした、よく考えた、思想的な内容がなければ、煽動は空文句になる。

実践家がしかじかの命題をどう理解しているか、しかじかの見解をどう実行しているかを、いっしょに討議することが必要である。そうしなければ中央機関紙編集局は宙に浮きその宣伝が受けいれられているかどうか、その反響があるかどうか、それが生活にどんな変化をあたえているか、どのような訂正や補足が必要であるかが、わからない。そうしなければ、社会民主主義者は、作家は書き、読者は読むというような状態に堕落してしまう。われわれの党的結びつきの意識はまだ弱い――これを言葉によっても実例によっても補強しなければならない。